

---

# 難易度調整

En

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

難易度調整

### 【コード】

N9001Z

### 【作者名】

En

### 【あらすじ】

風邪と

テレビと

破壊の話

「風邪ひいちゃった…」

Xが力無く言う。

昨夜のパーティーではしゃぎ過ぎらしい。

「お姉さま…大丈夫ですか…?」

Yが心配そうにしている。

「大丈夫じゃない…」

「もう少し寝てたら?」

公平たちにはその方が嬉しい。

机の上の小人は揃って頷く。

「うん。そうする。…Y?何で笑ってるの?」

「私にもお姉さまに勝てることができました…」

「何?」

「私は今まで…風邪をひいたことがありません…!」

「ああ…馬鹿だから?」

Xはそのまま寝てしまった。

Yは体育座りでいじけてる。

「本当に可哀想な子だ。」

「なんとか元気づけてあげたいね」

「…小夜子?お前大丈夫なのか?」

「何が?」

小夜子は昨日の記憶を無くしていた。

「X何したんだよ…」 「それより、Yの事をなんとかしなさい」

「…うん。そうだな」

「何か案ある人ー」

神田が聞く。

「はい」

橘が手を挙げた。

「元気の出る番組を見せましょう」

「却下」

「何故!？」

神田は呆れていた。

「今は朝だからニュースしかやってないぜ?それに、妹ちゃんの趣味が分からん」

「そんな事もあるうかと、殆どの人が楽しめる番組を録画してあります」

「そんな物が!？」

「今DVDを持ってきます。さあ桑野いこう」

「ふ…任せる!」

そして桑野は橘と共に外へと飛びだった。

「持ってきました!」

「てかそれ何だよ」

「見れば分かります」

橘は巨大なDVDプレーヤーに持ってきたDVDを入れた。

「始まりますよ…」

「妹ちゃん!一緒にDVD見ようぜ!」

「…はい…」

Yはかなり落ち込んでいた。

これで立ち直るのだろうか。

『ケンゴオ…』

「特撮かよ!?」 『イコーゼ! イエーイ!』

「しかもこれ男の子向けだし…」 『パウワアーダイザー』

「けどこれ面白いから…」 『ヘンシン! ッテイッテ…』

橋が言い切る前にYの拳が彼の目の前に振り下ろされる。

「『ロウケット オン』

「ほら。これじゃ嫌なんだって」 『ホカニナンカネエノカ!』

「そんな…」 『レイダアー オン』

「静かにして…」 『チエーンソー オン』

「え?」 『ツシャー!』

橋たちはYを見上げる。

彼女はテレビに釘付けだった。

「ほら! これで正解…」 『ナンドモオナジテクラウカヨ!』

再びYが拳を振り下ろした。

「『リミット ブレイク』

「静かにして…」

「Xみたいだ…」

「妹ちゃんは集中するところなるのか?」 『ハナセエ!』 「あ、終

わった」

「橘くん…」

「何でしょうか」

「続き…」

「ああ待ってたら始まるから」

「…」

「凄く嬉しそうだな…」

それからYは今までの16話を一気に見た。

内容に関すること 例えば「新田が可哀想」とか「大文字さんは何がしたかったの」とか は話すことを許した。

「面白かった…」

「それは良かった」

「学校に…スイッチをばらまくなんて…許さない…」

「ハハツ。そうとうはまったみたいですね。流石俺ですね」

「流石なのはお前じゃなくてこのバンドだよ」

「そんなあ」

それから暫くしてYが何かに決心した顔で口を開いた。

「ちよつと…出掛けてきます…」

だが、公平たちは彼女のその様子に気がつけなかった。

「行ってらっしゃーい」

「なるべく遅くならない内に帰ってきてなよ」

「…無理かも…しれませんが…。けど…頑張ります…」

そして、Yは外出した。

「しかし…妹ちゃんはそのジャージで行ったのか？」

Yは服をジャージ一着しか持ってないらしい。

だから昨日Xは『僕の服を貸してあげるよ』と言ったのだが彼女は断ったのだ。

なにか愛着のある物らしい。

それでも、最終的に出かける時はXの服を借りることになった。

だが、さっきはそのまま出た。

「よくあれで出れるな」

「あれ少し小さいよね」

「Xが服を貸してやるって言ったのに」

「なんか大事なことをするつもりなのかもな」

神田は思いつきを口にした。

「勝負下着的な？」

「そう。そんなの。大事な事をする時は絶対この服って決めてるんだよ」

「勝負ジャージってなんだよ」

木之本は言いながらテレビをつけた。

『臨時ニュースです…』

「何だ？」

『秘密結社ファルコの怪物が冬季休業中の 高校を襲撃…』

「ファルコだと!？」

「俺たちの高校じゃん」

「冬休みで良かったな」

「最近思ったんだけどこいつ等やっぱ怖いよな」

『現在、怪我人20名死者は無し…』

「死者無しか…。不幸中の幸いだな」リリリリッ…

「おい、電話が鳴ってるぞ」

「Xの家電じゃん。とれないし、X寝てるし無視でいいだろ」

『怪物は、悪のスイッチをばらまくのを止める、などと要求してお

り…』

「」

Yは本当に残念な子だ。

「いや…。そんな馬鹿な」

「けど…。三年前までサンタ信じてた位だし…。いや流石に無いか」

『怪物の姿が映りました…』校長先生を出して…スイッチを寄越しなさい…』  
「」

「やばい！」

「止めないと大変な事に…」

「もっとなってる！」

「桑野！Xを呼ぶぞ！」

「おう！」

Xは起きなかった。

風邪が相当酷いらしい。

「仕方ない。俺たちだけで行こう」

「まさか桑野しか頼れる奴がいないなんて…」

「どっという意味だ！」

「そっという意味だよ。ほら、行くぞクワガタ」

「く…まあいい…」

桑野は公平たちを連れて飛び立つ

Yは校長を掴み上げていた。

「スイッチを渡さないつもり…？」

「スイッチつてなんですか！？」

「あなたが一番よく知っているでしょう！」

珍しくYは大きな声を出した。



「スイッチを出さないなら…力づくで見つけます…！あなたも…逃がさない！」

「ひい！」

Yは既に半壊している校舎に手を突っ込んだ。中の机が壊れる。

「…どうするよ。これ」

「本当のことを言ったら止まるだろうけど…」

「下手したら自殺するんじゃないか？」

桑野はグラウンドに降りた。

「貴様等はここで待ってる！後は…俺がやる！」

「何馬鹿な事言ってるんだ！」

「ふ…心配するな！必ず戻る！」

「そういう事じゃ無いんだよ！この…」「トウ！」

「…飛んでつちやたね」

「どうする？」

「とにかく俺たちも行こう！」

「…無いな…。どこにあるんだろ…」

Yはある筈もないスイッチを探して校舎を破壊する。

手の中に握った校長は既に気絶していた。

Yは中で生徒を見つける度にそれを外に出す。

しかし、生徒が暴れたり、Yが加減していないために怪我人は増えていった。

「待てい！」

「クワガタさん…？」

「校長！貴様何をした！」

桑野はどこか壊れている。

「え！？そつち！？」

神田はYに向かつて行きながらツッコんだ。

「クワガタさん…！」

「ふ…。さあ吐け！俺を停学にしたのも計画を順調に進めるためか！」

「校長気絶してるって…」

「おーい！妹ちゃん！」

「みんなも…来てたの…。見て…私、学園の自由と平和を守る為に…」

言いづらい。

言いづらいが言わなきゃ終わらない。

「あんな妹ちゃん。この学校には…ゾディアーツはいないんだ」

「…え？」

「その…全部妹ちゃんの勘違いというか…」

「…そんな」

そこでYは倒れた。

気絶したのだ。

それは、本日で最大の破壊をもたらした。

「ごめんなさい…ごめんなさい…。」

Yは泣きながら瓦礫の撤去をして、そこに埋もれていた人を含めて67人を治療した。

「ごめんなさい…何でもします…。死んで償います…」

「妹ちゃん！そ

んな事言っちゃ駄目だ！」

神田が叫ぶ。

だがYの耳には届いていないらしい。

「…」

Yはとうとう黙って治療に専念し始めた。

だがそれも、怪我人を捕まえて舐める、というものなので余計に恐怖を煽った。

「あ…逃げないで…。これは治療だから…」

そう言っても生徒たちには味見にしか見えない。

逃げる生徒を無理やり捕まえる姿は獲物を狩る怪物だ。

「恐くないから…。もう苛めないから…」

そうこうしながら十人ほど治療した所で生徒たちもこれが治療だと気付いた。

そうしてようやく生徒たちも逃げなくなった。

「怪我の酷い順に…並んで下さい…」

「羨ましい連中だ」

「神田はやってもらっただろ！」

「そうですよ！俺たちなんてやってもらっていないのに！」

「校長！いい加減に吐け！」

「あー。あっちも止めなきゃ」

「どうやって…」

小夜子が言いかけた時に桑野が巨大な指に捕まった。

Yの物ではない。

「何…この状況…」

「X!？」

「風邪は治ったのか！」「まあね…。それにしても酷いなこれ」

「どうしてここに？」

「起きたら偉い人から電話があつて、ファルコの兵器が暴れてるか  
ら助けてくれって、まさかYだったなんて…」

「あの電話か！」  
「Ｙちゃんどうなるんだろ…」  
「もう何とかなったよ。幸い死んだ人はいないみたいだし、Ｙも怪我人治療してるから見逃してくれっってお願ひしたらすぐだったよ」  
「お願い…？」  
「脅したら、の間違いだろ」  
「Xが地面を強く踏みつける」  
「何か言った？」  
「いえ、何も」

「つかお前も治療手伝ってやれよ」  
「…いや、ちよつと事情があつて」  
「事情？何それ？」  
「…何でもいいだろ！それよりＹに許してもらえたことを教えてあげないと！」  
「ああ…。そうだな」  
「妹ちゃん喜ぶぜ！」

「ほれじゃ…わたしはおほがめなし…？」  
怪我人を舐めながら言っているので舌がまわらない。  
「良かったな！妹ちゃん！」  
「全然良くなんかありません！」  
Ｙがまた叫んだ。  
力が入ったのか、手の中の怪我人が悲鳴をあげる。  
「ああ…！ごめんなさい…。今治すから…」  
Ｙはまた怪我人を舐めるのに専念する。

「ちよっ…何で！？せつかく僕が…」

「…らつて…。学校をこんなにくわひちゃって…せーしゅんふるふる…とるできないひ…生徒のみんなを恐がらへちゃうひ…」

Yがまた泣き出した。「…ひくっ…こんなひしちゃって…また…わたひ…」

「あー！もう泣かないの！分かった！何かの罰があればいいんだな！」

「…ふえ…？」

「明日から此処で、学校を直す修理を手伝え！」

「ほれくらひじゃ…」

「お前を殺したって何も解決しないだろ！？なら、学校の為に働け

よー！」

「…」

「もうみんな怒ってないから！ね？」

Xは治療された生徒たちや校長や公平たちに同意を求める。

「まあ…。悪気があったわけじゃ無いですしね…」

「俺たちも治してもらったし…」

「てか俺たちは最初から怒ってないぞ」

「つか、そもそも原因はXが妹ちゃんを傷つけたからじゃん」

「神田？今何て言ったの？僕よく聞こえなかったな？」

「そもそも原因は橋の持ってきたDVDにあると言いました」

「よろしい。ほら！みんな怒ってないって！」

「みんな…」

「Y！その子もう治ってるよ！」

「あ…。ごめんね…！」

次の日からYは学校の修理を無償で手伝うことになった。  
その一生懸命に頑張る姿が好感を呼んだ。

そして、Yの治療も報道されたので、その効果とその姿にも人気  
が  
でた。

「なんか…妹ちゃんの人生って随分イージーだな…」  
神田が呟いた。

「今までがハード過ぎたからね。ようやく難易度が調整されたんだ  
よ」

Xは嬉しそうに答えた。

終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9001z/>

---

難易度調整

2011年12月28日08時46分発行